

座談会

(聞き手・編集長 吉清英夫)

出席者(発言順・敬称略)

木村修 (ドルチア・オーナーシェフ)

伊与久 美子

(市川市社会福祉協議会会長)



右上・岸本竹代さん
左下・社会福祉協議会伊与久美子会長



本間勲 (昭和学院教師)
岸本竹代 (昭和学院元教師)
昭和学院ボランティア
活動部の皆さん

吉清 ドルチア洋菓子店と昭和学院ボランティア活動部の生徒さんたちが協力して、市内のお年寄り施設にクッキーをどける活動は休みなく40年つづいてきました。今日はボランティアにたずさわってこれたドルチアの木村社長、昭和学院の生徒さんと関係者の皆さんで、その成果を語り合いたいと思います。まずドルチアのオーナーシェフ・木村さんから、どんないきさつでこの企画が生まれたのですか？

木村 まずみなさん、こんにちは。はじまりは、単にお菓子作りをするだけでなく、社会貢献をしっかり行ない地元の人たちに尊敬される企業になりましょう、というドルチアの基本姿勢があります。ドルチアは洋菓子屋で今年で43周年を迎えますが、企



左上・ドルチア木村修オーナーシェフ
右下・本間 勲先生



施設の皆さんへ、お菓子とどけて40年
ドルチア&昭和学院生徒たち。

画の立ち上がりを支えてくださった岸本竹代先生とであったのは、そんなドルチアがオープンして間もない時期で、お菓子教室を通じての出会いでした。「お菓子教室をやりながら社会貢献をするんだよ」と、意気込んで岸本先生と相談していたんです。それで、このお菓子を「どこにお届けしたら喜ばれるだろうか」となった時岸本先生から「施設に配りませんか、普段お菓子を楽しみにしている人がいっぱいいますよ」とアドバイスをいただいた。そして老人ホームや、八幡学園など幾つかの候補の中から絞り実行に移したのですが、実際にドルチアの人手だけで千人に配るといのは大変な事だというのがわかりました。数が多いという事もありましたが、うちの社員が仕事を終えて届けにいくと、もう施設は閉まっている事が多かったんです。施設は閉まっているが早いですがからね。どうにか2年間続けましたが、どうしても無理がありました。そんな事を岸本先生に相談しました。「これは大変なことだね」と、すると先生は「うち(昭和学院)の生徒たちと相談して

なんとかお役にたてないかしら。折角はじめたボランティア活動だし、凄く良い活動なんだからなんとかつなげていきたいと思います」といってお言葉をいただき、そして今日まで40年続いてきたわけですね。40年の活動をおもいおこしてみると、様々なエピソードがあります。例えばNHKのドラマになったこともありまして。番組では活動内容も事細かに再現されていて、これは私達のお菓子業界でも話題になりました。聞くところによると、おばあちゃん、お母さん、娘さんの「昭和学院」親子三代にわたってこの取り組みをされた方もあるそうです。また社会福祉協議会の力添えも大きかった。

◇

吉清 なるほど、社会福祉協議会はどういう役割をはたしたんですか？まず、社会福祉協議会の活動内容から同協議会の伊与久美子会長、お聞かせいただけますか。

伊与久 まず社会福祉協議会（以下社協）について少しお話しします。社協は日本全国

の市町村すべてに、一つずつある民間の福祉団体で、社会福祉法という法律に基づいております。地域の人が、地域の企業や学校が、お互いに支えあい、助けあっているという身近な福祉の形をつくっていく拠点です。ですから私たち市川社協では「お互いさま」という言葉を基本理念にしています。困ったときも、うれしいときも皆一緒に頑張って受け止め、一緒になって前に進む。そんな「地域の力」を育てていくという意味をこめています。

そして、今回のお話に繋がる市川市社協の長年取り組んでおります「福祉きょうい」における3つの基本的な考え方があります。まず学校の教育に福祉を取り入れていく、教育機関を基盤とした「福祉きょうい」。それから地域の中で「市民が共に育ちながら」福祉を学んでいく「福祉教育」、そして市民全体で協力しながら福祉の底上げをしていくという「福祉協育」の理念です。県の社協、市の社協、共に福祉指定校というものを指定させていただき、福祉

教育を実施していただいています。昭和学院さんの小学部がこれから2年間、県の指定校になりました。これから助成金なども出させていたがながら子供たちにも実際の活動や、心構えなどを学んでいただき、これから先、自分達が担う役割などを考える勉強をし、その輪が広がる事を目標にしています。

吉清 ボランティア部の活動にはどんな協力をする？

伊与久 お菓子を届ける施設さんが私ども社協の構成メンバーになっているものですから、木村さんとお届け先の調整役をしています。施設の要望を直接聞いて木村さんに伝えたり、逆に木村さんの意見を施設に伝える事もあります。お菓子をもらった喜びや感謝なども、ダイレクトに私どもの所に来ますしね。今回の昭和学院さんとドルチアさんの関係はずっと見守ってきましたが、この関係は講演などの際も、良い事例としてお話しさせていただいています。

吉清 よくわかりました。では木村さんの

紹介にもあった企画の立ち上げから関わられた岸本竹代先生。木村修さんとは洋菓子教室が始まった頃からお付き合い合いたのですが、もとは昭和学院の教師をされていたのです。

岸本 高校から中学の方へ移り「ボランティア活動部」の前身となる「奉仕部」を作りました。当時はかなり部員の数が多く、100人ほどが在籍していました。活動も様々でまたご父兄の方や、先生方にもお手伝いをしていただきました。そうやって色々活動しているうちに、木村さんからケーキ（食品衛生法が導入される前までは、クッキーではなくケーキを届けていたんです）を届けるボランティアの話をいただき、生徒もケーキが大好きですから「良いチャンスだな」と思いました。最初はケーキだけでなく雑巾を生徒達が作って、同時に届けるという形でスタートしましたね。回る場所も多く、子供たちが四苦八苦したために雑巾をカットしましたが、お花を届けたり、お花の種を撒いたり、そういう様々な生

徒達の自主的な活動は平行して行なわれています。生徒達が自主的に、行く場所を決めてそういう自主的な活動をするというスタイルは、今日の活動にも受け継がれています。私は既に昭和学院を退職していますが、子供たちとのつながりは重度障害者とそれを支援する団体の「あじさいの会」という会を通して続いています。学生さんは日曜日に活動できるので「大変でしょう？」と言うと「もっと大変じゃありません、色々な事をする事によって教わる事が多いんです」といわれたり。

当時、定期的に幸運だったのは学院長の伊藤一郎先生に協力していただき、また学校の教育目標の一つに福祉教育をにかけていただいた事です。

吉清 岸本先生ありがとうございます。

伊藤先生は社協の会長さんを長く努められた、すばらしい人ですね。では次に、現在ボランティア部の顧問並びに、昭和学院の福祉教育を担当されている本間勲先生からお話を聞きます。現在のボランティア

部について教えていただけますか？岸本先生から部を引き継いで、どのくらいになりますか？

本間 もう15年になります。メインの活動は岸本先生の成果を継承して活動してきてその中の一つがドルチアのケーキ配達です。私が部を引き継いだとき伊藤一郎先生から「地域には福祉に関わる人たちが多くいるのでじっくりと進めてほしい」という言葉をいただきました。先ほどのお話にもしましたが、昭和学院は福祉教育に重きを置いてきました。昭和56年から県の福祉教育推進校に選ばれて2年ほど、研究や実践の機会を得ました。その後も何度か推進校に選ばれてその結果が今につながっています。

その柱は福祉教育の啓蒙と、地域に貢献する子供たちの育成です。その一つが、ボランティア活動部の育成。私が引き受けた時は学校での部活動参加が必須で部員も多かったのですが、今現在は自主的な入部者が主体で以前と大分雰囲気かわっているかもしれません。現在の部員は17名で、自分た



左上から 高校3年生・部長の大木光世さん、高校3年生・副部長の岡山美千さん、
中学3年・大木千広さん

下段 中学2年生・久保田汐織さん、中学2年生・橋本理沙さん、高校2年生・鈴木雅子さん

吉清 大木千広さんは、部長の妹さんですか？
大木 はい、そうです。私がボランティア活動部に入ったのは姉の影響で、中2になって入ろうと決心しました。去年初めてドルチアさんのクッキー配りに参加して老人ホームに行かせていただいたんですけど、孫のように暖かく迎えていただいたので凄く嬉しかったです。
吉清 お届けした施設の方とはどんなお話をされますか？また将来の目標がそれによってできたりしましたか？
大木 学校の事とかよく聞かれました。「ボランティアではどんな活動をしているの？」とか、普通に友人に話すように接していただいて、受け入れていただけるので施設に行くことに緊張もとけてきて、適度に緊張しつつ、でも凄く楽しいです。感じる気持ちがとても嬉しい気持ちなので、将来の夢がなんであってでも人の役に立てるような仕事をしたいので相手がとても嬉しい気持ちに

ちができる手の届くことを一生懸命やろうという取り組み方です。
吉清 お話をドルチアさんとの活動に戻し具体的なその内容を教えてください。
本間 入部した生徒達はまず実際に施設へ行き、職員の方に説明を受け、現実に施設の方と触れ合います。これは生徒の視野を広げることにもなりますし、また子供たちが元気で笑顔だと施設の方や、地域も元気になることを実感できるのではないかと思います。
 今年も例年通り11月23日の配達を予定しています。現在は10箇所の施設にお届けをしています。当日には、10時半にはあつまってクッキーの箱詰め、分担そして各々の施設に向かいます。
 初めての子は、地図を見ながら結構苦労するようです。中には中学・高校の6年間ボランティア活動部で活動する生徒や卒業後も関わってくれる生徒もいました。またクッキーを届けるだけではなく、2月に社協さんがやっているボランティアフェスティバルも毎年お手伝いするなど様々な活動

動をしています。そんな中で強く思うのは、ドルチアさんもそうですが、たくさんの人たちから生徒に活躍の場を与えて頂いている、という感謝の気持ちです。私たちは、そのテーマをどこまで、地域の方々との交流を大事に育てていきたいと思っています。
吉清 現在、新校舎となった昭和学院は学校の敷地がオープンで地域に解放された学校という印象が強いんです。まさに校風が育ったボランティア活動部でしょうか。
本間 千葉県のライトブルー少年賞をうちの学校のボランティア活動部の生徒は毎年頂いているんですが、地域での色々な活動を認めて貰っているのだと思います。去年一昨年と受賞した二人の生徒さんも、6年間ずっと続けてきた事が評価されて森田健作知事から直接受賞しました。その評価が部に良い影響を与え、さらに良い循環になってくればと思っています。福祉教育の推進の後押しになってくれていると思っています。

吉清 では、実際に生徒さんにお話を聞いてみたいと思います。
大木 3年部長の大木光世です。ドルチアさんのクッキーくぼりを手伝ったのが中学3年生のときからです。最初は、どんな活動かも良く知らず面白そうだなという興味本位で始めた活動でした。始めてのクッキー配りでは幼稚園が休日で子供たちに会うことはできなかったのですが、次の年老人ホームに初めて自分で手渡したクッキーを「ありがとう」と受け取って貰えたのがすごく嬉しく、印象にのこっています。今まで自分が聞いてきた「ありがとう」とは違う、深い意味があるなと思いました。
岡山 3年、副部長の岡山美千です。まだドルチアさんのクッキー配りには参加させていたいたいていないのですが、色々なボランティアを通してお年寄りや触れ合っているうち、今年92になる祖母とも会話をするようになったんです。ですからこのボランティアが凄く良い機会になったなと思っています。
大木 中学3年の大木千広です。



ボランティア活動部の皆さんをかこんで

なったりとか、話しをして今回の私みたいな相手の緊張を解いてあげたり努力したいです。

久保田 中学2年生の久保田汐織です。私が始めてクッキー配りに参加したのは、中1のまだ部に入りたての頃でした。最初はどんなものか分からなくて、色々な所について、出迎えてくれた人は皆笑顔で凄く嬉しかったです。

橋本 中3の橋本理沙です。私は小さい頃からお年寄りの方々や障害者の方々とは触れ合ってきました。しかし、歳を重ねるに当たってそういう出会いは少なくなっていました。しかし中2の時に大木千広さんからお話を頂きボランティア活動部に入ることになりました。今ではお年寄りに感謝して頂く事がなにより嬉しく、逆に私が感謝しているなと思っています。

鈴木 高校2年の鈴木雅子です。私と石井香奈さんは外部生で去年から昭和学院に入学したのですが他に入る部活も無いままボランティアに興味をもって二人で一緒に入部しました。体験入部の時、本格的な「足

長募金」の活動をしました。去年は八幡学園に行ったり、ドルチアさんの所に行ったりと沢山活動したんですがクッキー配りのとき、施設で一番高齢の102歳のおばあさんに会い「ああ、こういう方々に食べていただけるんだ」と思い、また見返りを求めない活動は凄く大事なんだと強く感じました。

吉清 ありがとうございます。

◇

話を戻し、再び木村さん。生徒さんのクッキーのボランティア活動についてどうお考えですか。

木村 はい。私達がいくらかお菓子をお届けしようとしても、生徒さんの参加がなければ出来ません。ですから、この取り組みを長年にわたって続けさせていただいているのは本当に素晴らしいことだし、また生徒さんも試験前の休日という忙しい時に来ているのに、笑顔で活動をしてくださっているのは本当に嬉しいことです。

社会福祉事業というのは、一人だけでは

吉清 そのドルチアの社会貢献の発想の原点はどこにあるのでしょうか？

木村 ドルチアを始めるにあたって、色々な本を読みました。その中で特に感銘を受けたのはカーネギーの著書でした。勉強したい人に勉強できるようにしてあげる人が真の教師だという言葉が非常に記憶に残り、その後ボロボロになるまで読みました。

その中で分かったのは成功している人は、必ずと言っていいほど社会貢献を沢山していること。地域のおかげで成長できた。ではどうやってそれを地域に還元しようか、という考えが出て来ます。例えば図書館を寄贈する場合でも、建物を建てて本は地域の方に寄付をお願いする。全て一そろいで送ってしまうと、地域の実にならないからです。地域と共に育てる社会貢献、これがもっとも重要なのではないのでしょうか。ですから、今日集まって頂きこの活動を支えてくださった皆さんに心より感謝しています。

吉清 伊与久さんの地域貢献についてのご意見を聞かせていただけますか。

伊与久 先ほども申し上げましたが「お互

なにも出来ないものです。長いこと続いている意味がすごく私にとっては嬉しいことです。感謝の意思表示がとても出し切れないくらいですね。

また、世間様も色々と見てくださっているという所がありまして例えばそれは前述したNHKさんの番組であったり、また隠れた所で私の自慢が一つあります。全国洋菓子協会連合会の会長さんからお電話をいただいた、そのボランティア活動の事を聞かれたんです。

「色々な活動をして、取材なども受けていらっしゃるようだけれどどうやってたんですか」と。私は「ともかく皆さんに協力していただいているお陰でできています」としか答えられませんが、その事はとても嬉しいことでした。始めた当初の生徒さんや、岸本先生、社協の伊藤先生のご理解、そして本間先生も。ともかく本当にありがたかったとおもいますし、それが今日に繋がっているんだと強く実感しています。私が現役でいられる間は、つづけて行きたいですし、自分の次の世代にもつなげていきたい。

いさま」という言葉が市川の隅々まで行き渡るような、そんなまちにしたいと思います。その原点はやはり皆さんの活動なのではないかと思っています。

吉清 本間先生、ボランティア活動部の地域に対する貢献とはどんな事でしょうか。
本間 学校と言うと、なかなか外からは見えなないところもあるんですけど、子供たちが外に出てその姿を見ていただければいかに子供たちが外に向けて活動して色々な事を学んでいるんだという事がわかっていただけたと思います。その時何を見るかと言ったら子供たちの笑顔だとか元気が、いかに社会を明るくするかとかそういう所を見てくださるんじゃないかと思います。皆が元気になる雰囲気であれば、いい社会につながるのではないのでしょうか。

吉清 今日放課後の大切な時間をいただいている楽しいお話、ありがとうございます。生徒さんがしっかりしているなあ、というのが僕のうれしい感想です。では11月23日にむけて、是非がんばってください。

写真・文まとめ TARO